

平成 21 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520508

研究課題名（和文） 平地部における開発と環境の変化に関する歴史的研究

研究課題名（英文） A Historical Study on the Development and the Change of the Environment in Flat Land Areas

研究代表者

原田 信男（HARADA NOBUO）

国土館大学・21世紀アジア学部・教授

研究者番号：20208680

研究成果の概要：東京都日野市・八王子市という地域を対象を限定して、地方文書の整理・検討を行うとともに、当該地域の考古遺跡などの実地踏査のほか、考古遺物を再検討しつつ、旧石器から近世までの土地利用および環境の変遷を、長い歴史の変遷のなかで通史的に明らかにしえた点に大きな意義がある。また古文書や村絵図を新たに多数発掘し、低地部とはいっても山際では焼畑が行われたり、多摩川流域の開発には洪水被害や用水路開削をめぐる紛争が多かったことや、砂利採取による人工的な水害が発生するなど、開発の様相を具体的に指摘した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	450,000	3,350,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史・歴史地理学・考古学・近世史・環境

1. 研究開始当初の背景

もともと研究代表者は、関東平野東部の低地部において、明治大学木村礎研究室の調査研究に携わり、その成果として共同研究『村落景観の史的研究』『村落生活の史的研究』を刊行した。これによって旧景観の残る関東平野東部の実情を知ることができたが、比較的开发の進んだ同西部地区の様相についても研究を行いたいと考えていた。東部地区とは異なり、西部地区では開発に伴う考古遺跡の発掘事例が多いため、その成果を利用して、開発と環境の変化を、まさに旧石器時代から通史的に扱うことが可能である点に、何よりも研究対象地としての魅力があった。日本最大の低地である関東平野全体における開発と環境変化の全貌を知るための調査地とし

て、平地外縁部で台地を含み山地部の入り口となる東京都日野市・八王子市を具体的な研究対象地として設定した。

2. 研究の目的

もともと日本農業は、水田稲作を基本とし、これに適した低地部の開発に主力が注がれたと思われているが、この問題は単純ではなかった。その時期について、研究者たちは、比較的新しいと考えてきたが、関東平野東部の利根川・小貝川流域では、後代よりも小規模ではあっても、すでに奈良・平安期に開発が進められてきた。まず、これに関して関東平野西部ではどうであったのか、が問題となるが、一方で近世に展開される低地部の大規模な新田開発についても、それほど単純では

ないという事情がある。とくに台地部における畑作地の開発の問題のほか、山間部の入り口のあたり八王子市川口地区などでは、山林の開発およびその土地利用に関わる問題も見逃すことが出来ない。こうした開発に関わる問題は、地域の地形条件や開発年代の差異によっても大きく異なり、そのことが環境の変化にも大きな影響を与えていることが考えられる。それゆえ本研究では、研究対象地域を日野市・八王子市に取り、低地部を中心としながらも、台地部・山間部まで視野に入れるとともに、旧石器時代から近世末期までの開発と環境の変化を、通史的に追求する。

3. 研究の方法

関東平野東部地区では、旧景観が良く残るとともに、近世地方文書などの史料の保存も良好であった。これに対して同西部地区においては、両者の残存度はかなり低く、文献史的には不利な条件下にある。すなわち首都圏周辺部として、戦後に著しい都市化の波を被ったために、旧地形は改変せられ、住居の建て替えによって、古い土蔵などが姿を消すとともに、そこに保存されてきた多くの古文書類も失われた。しかし開発の進行は、改正された文化財保護法によって、該当地には発掘調査が義務づけられたため、詳細な報告書群が作成される結果となった。それゆえ本研究においては、一方で文献史学の生命線たる古文書類の調査研究に主力を注ぎつつも、同時に考古学の発掘担当者および研究者の協力を得て、旧石器から近世に至る発掘報告書の点検とともに現地踏査を行うことで、旧景観の復原を試みた。幸いにして、まだ古文書所蔵者も決して少なくはなく、未整理のままの文書群についても、それらを整理して目録を作成する。さらに、これに基づいて検討するとともに、開発や景観および環境の変化を雄弁に物語ってくれる村絵図類を積極的に調査し、重要なものについてはトレースを行い本研究のための検討材料とする。こうした資料類を元に、現地調査を徹底し、逐一資料との突き合わせていくことで、本研究の課題に迫りたいと思う。

4. 研究成果

本研究は、通史的な流れのなかで、開発と環境の変化をみていくため、それぞれの時代に詳しい専門家の協力を得ることが必須である。それゆえ6-(4)に後述する研究協力者との研究会を重ね、これを通じて、以下のような成果を得ることができた。

(1)旧石器時代

当該地域である多摩川中流域においては、旧石器時代の遺跡は比較的少なく、実態も明らかではない。しかし3万5000年～1万年くらい前に形成された立川ローム層からは、

旧石器時代の遺物が発掘されており、この地域一帯に人々が生活を始めた痕跡が窺える。日野・八王子地区においては、七ツ塚・石川天野・下耕地・西野遺跡などがあり、約2万5000年以降の黒曜石を含む石器群が出土している。ただし武蔵野台地南部を流れ、旧石器の遺跡群が重層的に存在する国分寺市に端を発する野川流域に較べると、多摩川中流域の旧石器遺跡は、継続性が弱い点に留意すべきだろう。また当該地域の石器群は、黒曜石を主体とするナイフ型石器で、狩猟活動が生活の中心であったことを窺わせるが、陥穽など罾猟の遺構は発見されていない。ちなみに八王子市七ツ塚の黒曜石については、本研究における分析依頼の結果、10点中9点が長野県蓼科冷山群で、1点のみが和田土屋橋西群であることが判明した。さらに遺跡分布からは、初め多摩川・谷地川の合流点付近の低地部を拠点としていたが、次第に台地部の谷戸奥へと進出していったことが読みとれる。

(2)縄文時代

縄文時代になると、遺跡は台地面から低位段丘面にかけて広く分布するが、傾向としては台地面から低位段丘面へと移行していくことが窺われる。旧石器から継続する七ツ塚では、台地面に遺跡が展開するが、縄文中期中葉までは住居は、谷地川の小支谷沿いの台地面に、1～3軒程度点在するにすぎない。しかし中期後葉以降になると、住居件数は著しく増加し、環状に配置されるようになる。しかも住居地のほかに、多量の遺物集中地点や屋外の埋甕や炉なども検出されるほか、墓域の形成が始まるなど人々の生活の活発化が窺われる。さらに後期に至ると、台地上の以降は著しく減少し、日野市南広間地遺跡に代表されるように、多摩川流域の日野低地部への進出が顕著となる。多摩川と浅川の合流点一帯に形成された沖積地における土地利用が活発化してくる。また生業形態においても、出土遺物としては、石鏃と石錘の多さが目立つことから、多摩川・浅川を漁場とした生産活動が中心となっていたことが窺われる。すでに前期～中期においても、少量ながら土器類が出土しており、河川を生活の基盤とした小集団の存在が想定できるが、その本格化は縄文後期を待たねばならなかった、といえよう。

(3)弥生・古墳時代

当該地域のみならず、東国においては一般的に弥生時代の遺跡・遺構は少なく、その実態については不明な点が多い。八王子市石川天野遺跡は、加住南丘陵東端から日野台地にかかる丘陵地に位置し、数多くの開析谷が刻まれた起伏に富んだ地形条件下にある。ここには弥生後期から末期において、丘陵頂部の平坦面に数軒程度の集落が営まれていたことが知られる。ところが古墳時代前期・中期

には、集落域としての土地利用痕跡は窺われず、当該時期には廃絶されていたものと思われる。しかし、やがて後期に入ると、再び集落の形成が始まり、ここでは著しい土地利用の変化が見られるようになる。例えば集落が大谷沢に面した南斜面一帯に広がり、集落規模もかなり拡大化していく傾向が強い。しかも当該地域の植生に大きな変化が見られ、温帯落葉樹が減少する代わりに、照葉樹や杉などの増加傾向が見られ、水田雑草・畑作雑草の花粉検出が確認される。さらに、かつての自然流路が埋められた代わりに、新たな水路2条が形成され、これに挟まれた窪地に水田耕作土層の広がり確認されている。このことは、森林伐採が本格的に始まり、水田および畑地の開発が大幅に進行したことを物語ると考えられる。すなわち当地域における生産活動の拡大が、地域環境の大きな改変をもたらしたためである。しかも、こうした開発を推進した集団は、弥生末から古墳前・中期の人々とは、おそらく系譜を異にするものと思われ、希少性の高い特殊な農具類の出土が見られることや、遺跡地付近の北大谷古墳の性格などから、7世紀前半頃には、ヤマト政権の東国経営とも相まって、飛躍的な開発を行おうような富裕層を主体とする集団の進出を想定することも可能と思われる。また一方、多摩川流域の低地部に位置する日野市南広間地遺跡では、縄文後・晩期の遺跡を含むが、弥生期における土地利用は空白で、石川天野と同様に、古墳時代前・中期に再び集落が小規模に形成され、同後期に至って、集落が著しい増加をみる。その分布傾向としては、多摩川旧流路右岸の自然堤防微高地に集中する。一部浅川寄りにもまばらに散在するが、洪水による流失事例も確認される。ただ、この時期の南広間地遺跡では、農耕関連遺物は少なく、水田域についても未確認で、農耕への依存度は低かったように思われる。

(4) 古代

当地域低地部における開発の進展が、古墳後期に見られたことを承けて、古代に入ると、広汎に展開していく。まず自然堤防上にあたるオリエント地区においては、8世紀前半に大規模住居群が出現をみる。南北に直進する大溝を挟んで掘立柱や側柱をもつ建物群が検出されるほか、微高地に接する低地部には水田遺構が確認されており、低地部への大規模な開発行為が見られる。さらに微高地以外への進出も行われ、安養寺地区では大きな集落の存在が知られるとともに、農具類や遺構などから、湿田農耕の痕跡ほか、用水路および乾田の存在が確認されている。ただ集落も住居の建て替えが激しかったほか、度重なるように洪水が起きており、これによって廃絶された場合も少なくないが、その後においても、さらなる開発の進展が見られる。開発と

洪水の繰り返しを続けながら、この低地域において生産活動が行われてきたことが知られる。また南広間地遺跡の万願寺地区でも、多摩川沖積地の微高地的な砂礫層から古墳時代後期の土師甕が出土するが、洪水によって1mを越える砂礫類が堆積している。そして大規模な洪水後に、この面に集落が、8世紀末に形成されるが、ここでは大量の噴砂が確認されている。つまり巨大な地震が起きていることが知られる。すなわち古代には、低地部への開発が進展するが、洪水や地震など、さまざまな自然災害に襲われながらも、低地部への開発を続けてきたのである。先にも述べたように、南広間地遺跡では、古墳期における水田址の確認はなされていないが、古代になると多摩川の旧流路を利用して、砂地地帯において水田開発を展開させていったことを確認することができる。これは旧流路が洪水で埋まった後の凹地に用水を引いて水田とするものであるが、多摩川が氾濫するたびに、浸水と土砂の堆積を繰り返す。このため水田面の嵩は上がり、そのつど用水路は造り替えられ、水田面積は少しずつ拡大するが、まさに洪水と改修による水田の維持・拡大が繰り返されたことになる。こうした水田は、何層にもわたって形成されているが、必ずしも継続的なものではなく、一時的な廃絶時期の存在も明白で、水田耕作継続への努力は並大抵ではなかったことが窺われる。これが10世紀以降になると、住居数がさらに増加する。しかも当地域周辺の台地上においては、この時期に集落遺構がほとんど確認されないこととは対照的に、平安後期頃から低地部において、集落形成が活発化してくることが指摘できる。こうした傾向は、当地域のみならず、同じような沖積低地に立地する日野市落川遺跡においても同様であり、古代末期からは特に沖積低地への進出および開発が盛んになることが明かとなる。しかもこれらは、洪水による土砂の堆積を前提としたものであり、むしろ自然災害を契機として、やや時間をおくものの、再び開発が進むという事実は注目に値しよう。

(5) 中世

文献史料の乏しい当地域も、古代・中世に入ると、わずかながら地名などが留められ、由比牧が置かれていたことが分かる。おそらく居住域よりも、はるかに広大な自然地形が存在していたことが窺われる。そして当地域には、こうした牧を経営しながら、水田開発を行った在地武士団が成長してくる。これに伴って中世村落が出現し、荘園という大規模な私的所有地が、平安末期に成立をみた。すなわち撰関家領船木田荘で、本荘と新荘からなっていた。その後、南北朝期には京都の東福寺に寄進され、荘内には南河口郷・北河口郷や青木村など、本研究の調査対象地を含ん

でいる。もともと船木田荘の地名は、造船用木材の産出にちなむとされているが、このうち南河口・北河口の両郷は、平地部から山間部への入り口にあたり、近世においても杉や檜など良材の供給地として知られている。しかも、今回の近世文書調査によって、その生産に焼畑が行われていたことが判明している。また青木村は、丘陵部の事例として検討した宇津木台遺跡群に含まれる地域で、その地域的景観を考古学の発掘成果によって窺うことができる。この丘陵地の縁辺部では、平安中期に大溝と堅穴住居が検出されており、おそらく丘陵部谷戸の湧水を利用した土地開発が試みられたが、その遺跡状況から計画途中で放棄されたことが知られる。すなわち古代末期に、かなり大規模な開発の手が加えられ、計画は中絶をみたが、やがて中世に入ると、そこに一定のまとまりをもった村落が成立をみた。そして村落の周囲には、8～10町規模の地域を内包する形で境堀が巡らされている。この境堀の内部からは、12世紀中葉から15世紀前半に収まる遺跡・遺物が出土し、掘立柱建物のほか土坑墓・火葬墓の存在が確認できる。なおこの境堀に性格については、13～14世紀に進行する下地中分に伴うものであった可能性が高く、在地領主による一円所領の境界を明示するためのものと考えられる。いずれにしても丘陵縁辺部においては、古代の開発は不十分なままであったが、中世に入って本格的に開発が進んだことが窺われる。また、こうした境堀については、近年になって各地で確認されているが、八王子市内でも、このほか館町遺跡でほぼ同様のものが検出されている。ちなみに、この事例については、すでに研究代表者が、1992年に助成を得た文部省科学研究費によって試掘調査を行っており、その成果報告がある。

(6)近世

近世的村落の形成

丘陵部の宇津木台遺跡群に含まれる石川村などの事例から、近世的村落の開発・形成過程を窺うことができる。先に見た宇津木台遺跡群の境堀内の遺構は、中世村落の概要を示すものと考えられるが、戦国末期から近世初頭にかけて、大きな変化が見られるようになる。当地域における開発伝承に、七名字七氏子と呼ばれる家々があり、彼らは古くからの旧家で、丘陵縁辺部に本拠を構えていた。ところが近世に四給となった石川村の名主のうち最も有力な3家は、縁辺部から離れて、台地部前面の平地部へと進出してくる。しかも、この3家のうち、守屋家は神奈川県津久井から、石川家は東京都あきる野から来て土着したものであり、最後の源原家は七名字七氏子の沢田家からの分家で、あくまでも旧家からすれば傍流でしかない。また近隣においては、甲州武田氏の遺臣が住み着いて開発土

豪となっていることや、小田原北条氏の八王子支配に伴い、その家臣が定住して土豪化し、村落レベルの新たな支配者となった事例も少なくない。ここに中世村落とは異なる新たな近世的村落が成立することになる。すなわち戦国末期の在地状況の流動化のなかで、新たな人々の移動が活発化し、その過程で、台地縁辺部から河川に近い前面の平地部への開発が進んだことが指摘できる。例えば、石川村の天正検地帳の分析からは、16世紀末において、水田12町9反余・畑地34町8反余で圧倒的に畑地が多く、中世における開発の主流が丘陵地縁辺部の畑地であったことが窺われる。これに対して、数少ない水田のうち、まとまって5反以上の存在地は、A丘陵部の湧水を利用したもの（掘上田を含む）、B谷地川沿いの用水を利用したもの、Cやや広めの谷田を利用したもの、といった3類型に分類できる。このうちA・Cは中世以来のものと考えられるが、その用水路が17世紀に入って付け替えられることなどから、Bは近世における開発の主体をなしたことが明かとなる。すなわち近世的開発とは、多摩川支流の中規模河川である谷地川沿いの低地部を主体として進行し、こうした河川周辺における環境の変化をもたらすもので、水田開発を強く意識していたことが指摘できる。

大規模用水路の開削と水田開発

すでに縄文後期から、多摩川流域の低地部に人々が進出していたが、当時の生活規模は、河川環境自体に大きな変化を伴うものではなかった。ところが近世的開発では、かなりの林野伐採や長距離用水路の開削を行うものとなった。なかでも日野用水は、1567年の開削と伝え、八王子市平・粟之須、日野市日野本郷・万願寺・下田・新井・石田・宮・上田などの村々を潤すもので、総組合高3293石余に及ぶ。このうち日野本郷が2200石を占め、ここを中心に多摩川流域の広大な沖積地の水田化を可能とした大規模用水であった。戦国末期の用水路開削という伝承が正しいかどうかは大いに問題があるが、その主体が北条氏照の庇護をうけ、美濃国から移住した日野本郷の佐藤隼人（上佐藤家の先祖）である点が興味深い。すなわち宇津木台遺跡群の石川村の事例と同じように、戦国末期に入植した土豪たちが低地部の水田開発に従事しており、同様の開発パターンは武蔵東部古利根川流域の三郷市一帯でも見られることから、こうした傾向は関東平野開発の共通的事例と考えられる。さらに日野用水は、17世紀前半から19世紀にかけて、これらの地域での石高を著しく増加せしめており、近世を通じて、水田生産力を質量ともに向上させる役割を果たしたことになる。ただ、多摩川流域の沖積地といっても、一気に水田化が進んだわけではなく、これらの地域はもともと稜

場として利用されてきたところで、その開発過程は、それぞれの地形条件によって異なり、揚水車などの利用も行われている。むしろ宇津木台遺跡群を構成する平村・粟之須村は、日野用水の取り入れ口付近に位置するが、丘陵部と多摩川沖積地との間が狭いという地理的要因から、大規模な水田開発を行うことは不可能であった。とくに粟之須村は、当地域における開発の問題を考える上で重要な村落で、1797年段階で、下田7畝ほのか、上畑1町1反余・中畑5反余・下畑1町8反余という耕地しか所有していなかった。このうち集落南部の古くからの畑地は、ほとんどが個人持ちであるのに対し、日野用水付近の水田を含む畑地は全て村持ちとなっている。すなわち粟之須村は、近世後期の段階で少量のまとまった水田を持ち得たが、これらの開発には村民が共同してあつたことが窺われる。しかし同村の名主である関根家は、かなりの資産家で、古くから日野用水沿いの東光寺村付近に水田を有しており、しばしば同村と相論を繰り返しているが、これは用水をめぐる争いであったものと考えられる。豊富な資金力を誇る名主・関根家は、こうして粟之須村以外にも水田を有していたが、一般の村民は旧秣場を開発し、やっとのことでわずかな水田を、共同で手にしたのである。むしろ、こうした粟之須村においては、低地部よりも台地部の畑地を中心とした高倉新田に生産力の増大を求めた、と考えるべきだろう。こうして多摩川沖積地は、近世を通じて、かなり大規模な開発が行われたところから、微妙な地形に依りつつ、その自然環境を大きく変えるところとなったのである。

河川と山地部をめぐる生業と開発

当地域における開発は、基本的に丘陵部・低地部において、近世に本格的に進められ、その中心は農業にあったことに疑いはないが、河川や山地部も重要な生産活動の対象となってきた。まず河川については、多摩川での鮎漁が広く知られている。ここで捕獲された鮎は、将軍家に献上されるなど良質なもので、古くから漁場をめぐる争いが起きている。鵜飼いによる鮎以外にも、鯉や鮎および鮠なども釣りや網漁で大量に捕獲されたが、献上鮎の漁期中は禁漁とされた。のちに献上から買上制へと変わったが、こうした漁撈活動に対しては川役銭がかけられた。縄文以来の漁撈活動においては、河川自体への開発行為はなかったが、水田化のための用水路開削に加えて、近世後期には多摩川からの砂利採取が問題となっている。例えば江戸城修復のために、多摩川沿いの河川敷から大量の砂利が採取されたため、土地全体が低くなり洪水が頻発したことから、川沿いの13ヶ村が領主への嘆願を行っている。当地域は、幕府の中心地たる江戸に近いと、その開発と環境の変

化は、大都市の発展に大きく規定されることとなった。1767年の大洪水では、田畑砂入2669町・切所348カ所・流家643軒・水死者2154人・水入村々280村に及んだ。また多摩川は、利根川に較べて河床勾配が大きいことから、大規模な舟運の発展は見られなかった。鮎の献上や砂利の運搬には、多摩川水運が利用されたであろうが、最も重要であったのは筏流しすなわち材木の運搬であった。これは大江戸の家屋に必要な不可欠のもので、当地域のみならず荒川を利用した飯能・秩父地域も同様であった。先に述べたように当地域は、中世船木田荘時代から、良材の産地として知られたが、その生産には焼畑が行われてきたことが、今回の文書調査から明らかとなった。当地域の検地帳類には、少なからぬ数の切畑が登場するが、これらのほとんどが焼畑であった可能性が極めて高い。焼畑は、自然の再生力を利用したもので、山間部の開発と放置を循環させるところから、森林の維持に役立っているが、そこからの猪などの獣害も少なくはなかった。ところで、当地域の焼畑の主力は材木の生産にあったが、これに関しては、先の小規模村である粟之須村名主の関根家の活動が興味深い。関根家をはじめとする八王子周辺の資産家は、山地部の焼畑による材木生産に力を注いだ。とくに関根家では、江戸の材木商が集まる深川に出張所ともいうべき家屋を有している。こうした事例は、秩父郡上名栗村の名主家の場合でも見られ、関東平野周辺部の山地部から大量の木材が江戸に供給されていたことが窺われる。こうした焼畑による材木生産によって、森林の荒廃化が進み、多摩川における洪水の原因となったかどうかについては、慎重な検討が必要であろう。いずれにしても、当地域においては、本格的な水田開発が進展し、大都市・江戸を形成せしめた近世に至って、大規模な開発が進み、自然環境を大幅に改変せしめたことが指摘できる。

(7) 成果資料

この3年間の研究を通じて、①八王子市石川町：石川家文書目録（作表エクセル：文書総数1259点）、②同源原家文書（作表エクセル：文書総数669点）、③日野・八王子関係近世村絵図トレース集（作図pdfファイル：計48点）、④七つ塚遺跡出土黒曜石出土地分析表（サンプル数10点）を作成した。このうち①②は、両家および八王子市郷土資料館に作成した目録を寄贈予定。

(8) 本研究の成果刊行予定

研究代表者である原田による編集で、後述の研究協力者9名とともに、ゲストスピーカーである久保純子（早稲田大学教育学部教授）を加えて、以下のような内容の研究書『開発と環境の変化をめぐる通史的研究（仮題）』を2010年度中に刊行する予定である。

第1部・総論：先史～古代の通史的展望	原田信男
序章：日野・八王子の地形的特質	久保純子
第1章：先史時代における日野八王子地区の景観と開発（旧石器・縄文）	上敷領久
第2章：古代における谷戸の開発（弥生末から古墳以降まで：石川天野）	土師由美
第3章：古代における沖積地の開発（古墳から奈良平安：南広間地）	土師・梶原勝
第2部・総論：中世～近世の通史的展望	原田
第4章：中世～近世における丘陵部の景観と開発（宇津木台）	梶原
第5章：中世～近世における沖積地の景観と開発（南広間地）	原田・土師
第6章：近世初期における近世村落の景観と開発（天正検：宇津木台）	酒井麻子
第7章：近世中後期における日野用水の開発と景観（宇津木台周辺）	清水裕介
第8章：近世中後期における新田開発の様相（宇津木台周辺）	井上潤
第3部・総論：近世における開発と景観の諸相	原田
第9章：近世・日野八王子地域における焼畑と開発	山本智代
第10章：近世・日野八王子地域における墓制と開発	飯泉今日子
第11章：親族組織と生活からみた村落景観の形成（石川家文書）	青柳美香
終章：通史的総括	原田

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

原田信男「農村文化の伝統」『月刊J A』647号、20～23頁、2008年、査読なし

原田信男「歴史学から見た焼畑」『季刊東北学』11号、35～49頁、2007年、査読なし

〔学会発表〕（計1件）

原田信男「中元報告：中世相模における水系と開発への批判」神奈川地域史研究大会報告コメント、2007年

〔図書〕（計5件）

原田信男『中世の村のかたちと暮らし』264頁、角川書店、2008年

原田信男「日本における稲作と魚」72～94頁、佐藤洋一郎編『米と魚』ドメス出版、2008年

原田信男「殺生罪業観の展開と狩猟・漁撈」中村生雄他編『狩猟と供犠の文化誌』森話社、21～57頁、2007年

原田信男「近世における粉食」木村茂光編『雑穀Ⅱ』青木書店、95～118頁、2006年

原田信男『コメを選んだ日本の歴史』文藝春秋社、264頁、2006年

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

原田信男「書評：水野章二編『中世村落の景観と環境』『日本歴史』696号、103～105頁、2006年

原田信男「若林村の草切り伝承」茨城県境町『町史だより ふるさとの歴史』境町歴史民俗資料館、22～22頁、2006年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田 信男 (HARADA NOBUO)

国士舘大学・21世紀アジア学部・教授

研究者番号 20208680

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

青柳 美香 (AOYAGI MIKA)

あきる野市役所教育委員会公民館勤務

有村 由美 (ARIMURA YUMI)

調布市遺跡調査会調査員

飯泉今日子 (IMAZUMI KYOUKO)

府中市教育委員会勤務

井上 潤 (INOUE ZYUN)

渋沢史料館館長

梶原 勝 (KAZIWARA MASARU)

文化財コム調査研究室長

上敷領 久 (KAMISIKIRYOU HISASI)

国分寺市教育委員会ふるさと文化財課

酒井 麻子 (SAKAI ASAKO)

藤沢市文書館史料専門員

清水 裕介 (SIMIZU YUUSUKE)

中央大学大学院博士後期課程在学

山本 智代 (YAMAMOTO TOMOYO)

錦城学園高等学校教諭